

今月の歌

花束にしても寂しきコスモスを天に放ればこの日の花火

小川恵子 角川『短歌』令和六年九月号

結界はいづこぞ澄める宙に浮く白き昼月淡く静けし

青木陽子『結界いづこ』

象^{かたち}なく風は棲むもの「お入り」と佇みてゐるエオリアンハープ

後藤すみ子『鯨の体温』

物語の中から自分をゆつくりと引つ張り上げてしおりをはさむ

小林理央『金魚すくいのように』

まっすぐに己見つめて歌にする楽しさ苦悩を教えたまいき

小林峯夫『途上』

岐阜にゆかりの歌人を取りあげた。

① いちめんに咲くコスモスは美しく、花の一つひとつも美しい。けれど花束にすると確かに寂しい。そのコスモスの花束を、「天に放れば花火」と歌い、澄みきった青空に煌めくような美しさを描いている。

② 夫を亡くした寂しさの中、短歌に生きがいを見出しながらの日々を送る。古来よりこの国では自然や生活のなかのそこに、神があり結界があった。昼の月の淡さのなかに、遥か彼方を思い、今は遠い夫を偲ぶ。

③ エオリアンハープは弦楽器で、自然に吹く風によつて音を鳴らす。シューマンに由来する命名という、古い楽器でウインドハープとも言う。風が棲むというとならえ方が魅力的で、大らかに包み込むような「お入り」は癒しである。

④ 作者が宮中歌会始に選ばれたのは中学三年生の時。あの制服姿から十年。朗らかで、素直で、内省的な歌は「あの時の理央ちゃん」を思いださせる。ひたっていた物語から抜け出す自分を詠う若い感性が光る。小林峯夫の孫。

⑤ 遺詠三十二首にある。師は窪田章一郎。故郷和良村に連なる山を望む病院で臨終の間際まで歌を詠んだ。歌に対しても人生に対しても誠実に生きた。歌人としてこのようでありたいと思う。

(篠田理恵)